

◆協議会の取組① 協議会の開催

(1) 協議会の開催：2回／年

- ・第1回協議会
決算・予算や調査計画を協議
※ 令和元年7月19日（金）
- ・第2回協議会（2～3月頃）
調査結果等を報告



◆協議会の取組② 勉強会の開催

(2) 勉強会の開催：1回／年

- ・令和元年10月24日（木）
- ・ウナギ資源の保護・増殖対策に関する関係者等の意識の醸成の向上を図る
- ・講師による講演及び意見交換



◆石倉かご設置の効果(ウナギの安らぎの場を提供)

河川環境の改善

ウナギの住処



餌となる生物(エビ類等)を増やす効果



◆協議会の取組③ ウナギ資源の保護・増殖活動のPR

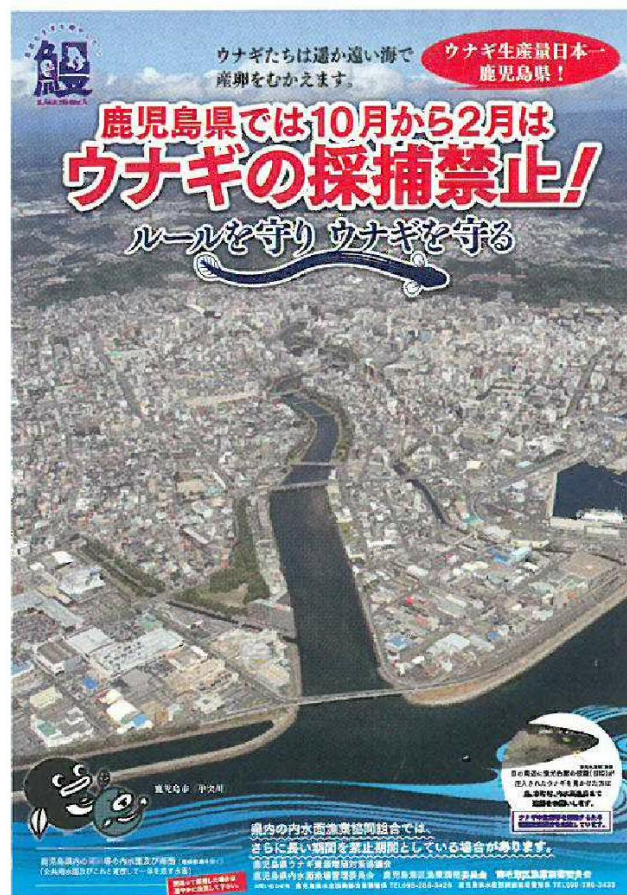
(3) ウナギ資源の保護・増殖活動のPR

- 1) ポスター，リーフレット等の作製・配布
- 2) 新聞，広報誌等への掲載
- 3) のぼり，帽子，腕章の製作・配布

《マグネットシール》



《ポスター》



《帽子》



《のぼり》



《パンフレット》



を行っているが、参加者を対象にしたアンケート調査で「人工種苗について知りたい」「産卵や生体について聞きたい」といった回答が寄せられるなど関心も高まっているという。担当者は「ウナギは重要な食文化の一つですし、ウナギ資源の継続的な活用を目指して、参加者のニーズに合った内容の勉強会を開催していきたいと思っています」と、今後も勉強会や報告会を継続して行っていく姿勢を示している。

◆協議会の取組④ ウナギ資源の保護・増殖対策 (石倉かご設置による生息環境改善対策に関する調査)

- ★ 設置場所 花渡川感潮域の2箇所(右図)
- ★ 設置基数 2基/箇所 ※ 収容する石材の大きさは2パターン
(おおよそ人頭大とソフトボール大)
- ★ 石倉カゴ 1m×1.5m×1m



《石倉設置場所》



◆石倉かご調査結果の概要(H24～)

- シラスウナギ, 稚ウナギ, 黄ウナギ, 銀ウナギ等が採捕
- 放流された養殖個体を多数採捕
- 標識を付けて再放流した同一個体が再三採捕
- その他餌料生物も多数採集

石倉カゴが住み処, ウナギの隠れ家として利用されていることが判明

◆石倉かごの設置効果(水産庁事業メニューに追加)

協議会事業における花渡川での調査の結果、石倉かごが内水面における生態系の維持・保全・改善に寄与することが認められ、水産多面的機能発揮対策事業(水産庁)を活用した石倉かご等の設置が事業メニューとして追加された。現在、本県の3河川(高尾野川、川辺広瀬川、網掛川)で石倉かごの設置が行われている。

ウナギ保護へ 石倉の家作り

出水・高尾野川

伝統的な石倉漁を応用したウナギのすみか作りが26日、出水市の高尾野川であった。高尾野内水面漁業協同組合などで行った「高尾野川をきれいにする会(出水市)」が、ウナギの資源保護を目的に実施。同会によると、ウナギのすみか作りを実用化したのは、高尾野川が全国で初めて。すみかとなる石倉は、縦と横各1尺、高さ1・5尺のポリエスチル樹脂製の「かご」を敷き詰めたもの。26日は会員約30人が、鹿児島県内水面漁業調整規則で定められた高尾野川の捕獲禁止区域に4基設置した。密漁を防ぐため今後、同会が定期的に監視する。ウナギの資源枯渇は、防災護岸工事で生物の隠れ場が失われたことが原因の一つとされている。九州大などは昨年、県内の川に石倉を試験的に設置。天然のウナギが実際にすみかにしたことを確認している。

高尾野内水面漁業協同組合によると、石倉漁は、力でも簡単に設置できる。工事が少ないと、魚がいないと生きていけない。エサとなる生物がないことが一番の悩み。いろいろな魚の資源保護、増殖に取り組み、天然の魚が上流まで上っていくような川造りをしていきたいと力を込めた。(五反田和実)

「魚も人間と一緒でエサがないと生きていけない。エサとなる生物がないことが一番の悩み。いろいろな魚の資源保護、増殖に取り組み、天然の魚が上流まで上っていくような川造りをしていきたいと力を込めた。」

ウナギのすみかとなる石倉を作る関係者＝26日、出水市の高尾野川

銀ウナギ5匹確認

「石倉かご」設置調査 環境改善を実証

出水市

出水市の内水面漁協などで行った「高尾野川をきれいにする会」は26日、絶滅のおそれがあるニホンウナギの資源保護を目的に、同市の高尾野川に設置した「石倉かご」のモニタリング調査をした。産卵のため川を下り外

洋に向かう銀ウナギ5匹を含む10匹が、石倉にすみ着いているのを確認した。

国の水産多面的機能発揮対策支援事業を活用。4基ずつ2カ所に設置してあるうち、今回は河口から約500メートルの地点の石倉を調べた。捕獲したウナギは体長と体重を記録し、マーキングを施して放流した。

調査に同行した九州大学大学院・水産増殖学研究室の望岡典隆准教授によると、銀ウナギは汽水域で1、2カ月過ごし、外洋に出る準備をする。護岸がコンクリートで整備されている川はウナギのすみかが少なく、「石倉」がその役割を果たしていることが実証された。10、12月を親ウナギの禁漁期間にする意義も大きい」と言う。

石倉は昨年1月に設置。昨年の同時期の調査では銀ウナギは5匹

平成27年10月28日 南日本新聞

平成25年1月27日 南日本新聞